
BURNING MIND Judge Book

Ver 1.2

作成 : 2009/12/23

改定 : 202210/23

目次

ジャッジの役割.....	4
ジャッジにおける重要ポイント.....	5
立証責任.....	5
証明について.....	6
証拠資料について.....	6
反証責任.....	7
論題充当性.....	8
カウンタープランについて.....	8
ニューアーギュメントについて.....	9
フィアットについて.....	10
価値基準について.....	11
キャストライトアップについて.....	12
インパクトについて.....	12
感情について.....	13
人間性について.....	13
ジャッジの手法.....	15
議論をひも解く.....	15
ジャッジシートへの記入.....	15

BURNING MIND におけるジャッジポリシー

基本スタンス

BURNING MIND(以下 BM)においては、「ネオ・ディベート」を提唱している。

「ネオ・ディベート」とは、「あるテーマ（論題）に対して、対抗する2組（ディベーター同士）が、論理・感情・人間的魅力を駆使して、オーディエンスを説得するために議論すること。」と定義している。その為、ジャッジにおいても、論理・感情・人間的魅力を考慮し採点を行う。

採点比率

ディベートの試合において最も重要かつ客観的評価が可能なものは、「論理」の部分である。そのため、論理に関する配点を全体の70%とする。

「感情」においては、プレゼンテーションの技術やオーディエンスへの働きかけが、ビジネスの場や日常生活でも重要であり、全体の20%の割合で評価をする。

「人間的魅力」については、主観的判断が介在しやすい部分でもあるが、ネオ・ディベートを習得してゆくためには、常にその人間的魅力を意識しなければならない。そこで、全体の10%の割合で評価を行う。

ポリシー

上記の理由より、論理、感情、人間的魅力をバランスよくジャッジする。

論理においては、ストックイシューが論証されているか、政策実行におけるメリットおよびデメリットが証明され、インパクトが論証されているかを重視する。

感情および人間的魅力においては、後述する基準にのっとりジャッジする。

ジャッジの役割

公平性・中立性

ジャッジは、BMにおけるジャッジポリシーに基づき、議論に対して中立でなければならない。また、「論理」部分の評価においては、個人的な知識や経験、考え方を判定の根拠としてはならない。

判定基準の提示と説目責任

ジャッジは、判定理由をディベーターに説明し、双方のディベーターに納得してもらう努力をしなければならない。そのため、試合の流れを整理しながら各争点を整理し、明確な判断基準をもってジャッジを下し、その説明を端的に行う必要がある。

教育効果

講評を担当するジャッジは、単に判定理由をのべるにとどまらず、評価できるポイントの指摘や具体的改善点の指摘を行い、ディベーターおよびオーディエンスに対し、次につながる教育を行うことが望ましい。

ジャッジの心構え

- 1、公平・中立な立場で行う
- 2、ディベートの流れを記録すること
- 3、判定基準をもつこと
- 4、教育的アドバイスができること

ジャッジにおける重要ポイント

以下では、ジャッジにおいて重要となるディベートのルールと要素を説明する。

立証責任

立証責任とは

ディベートでは、肯定側に立証責任が課せられる。つまり、改革派である肯定側は、現状を改革するに足る（プランを導入するに足る）ことを証明する必要がある。

立証責任を果たすパートは、肯定側の立論パートでなくてはならない。それ以降のパートで示されても無効である。

立証責任を果たせなかった場合、その後の試合の内容にかかわらず否定側の勝利となる。

立証責任の成立要件

立証責任を果たすため、肯定側は下記の項目を、立論のなかで証明する必要がある。

- 1、現状の問題がなにか、またどれほど深刻か
- 2、問題の原因はなにか
- 3、プランは実行可能か
- 4、プランは問題を解決するか
- 5、どのようなメリットが生じるか

上記内容を、論拠と証拠を持って証明し終えたとき、肯定側はその立証責任をはたしたといえる。

証明について

証明とは

ディベートの試合においては、主張したのみでは、その主張が証明されたことととらえられない。「主張」と、それを客観的に裏付ける「証拠」（事実、統計などのデータや専門家の意見など）と、主張と証拠を結び付ける「論拠」の3点がそろった際に、初めて主張は証明されたことになる。

論拠の種類

論拠には主に以下のものがある。

- 1、動機に基づくもの
- 2、権威に基づくもの
- 3、因果関係に基づくもの
- 4、兆候に基づくもの
- 5、類推に基づくもの

証拠資料について

証拠資料とは

証拠資料とは、主張を証明する際に必要となる、具体的データのこと。

証拠が伴わない主張は、主張として認められない。

証拠資料の判断基準

データの有効性を検証するには、下記のポイントに注意する。

- 1、データが主張の裏付けとなっているか否か
- 2、データの量は十分であるか
- 3、サンプルとなる母集団の規模など
- 4、データは、正しく引用されているか
- 5、データの出所は、正しいか、信頼できるか

6、データは、新しいか

反証責任

反証責任とは

肯定側に課せられる立証責任に対し、否定側には反証責任が課せられる。つまり、肯定側が現状を改革するに足ることを証明し終えたのちには、

否定側は、

- 1、肯定側の立論の流れに合わせてその欠点や不備を指摘し、
- 2、その上で自説を展開し、
- 3、否定側の主張に妥当性があることを証明する責任がある。

反証責任を果たすパートは、否定側の立論パートである。

そのあとのパートで行っても無効となる。

反証責任の成立要件

反証責任を果たすため、否定側は下記の項目を、立論のなかで証明する必要がある。

- 1、現状を改革する必要がない
 - (ア) (問題が深刻でない、もしくは現状で解決できる)
- 2、改革案を採用できない。
 - (ア) (プランが現実的でない、問題解決できない)
- 3、改革案を採用すべきでない
 - (ア) (新たに深刻なデメリットが発生する)

上記内容を、論拠と証拠を持って証明し終えたときにのみ、否定側はその反証責任を果たしたといえる。

否定側の反証責任において重要なことは、肯定側主張の単なる否定のみでなく、「プランを導入することにより弊害が出る」という積極的な証明をすることである。

論題充当性

論題充当性とは

ディベートでは、効率的かつフェアな議論を行うため、論題が存在する。

試合においても論題を逸脱した議論は無効となる。

肯定側が論題を支持しているかどうかを見極め、支持していないことが証明された場合は、肯定側の議論は無効となる。

論題充当性の要件（判断基準）

肯定側の議論が論題を支持しているかどうかを争うための要件は以下の2点である。

- 1、論題を解釈する際の基準は適切か
 - (ア)（文脈的、文法的、専門的な解釈において）論題に用いられている用語の範囲を逸脱していないか？
- 2、論題の語句についての定義は適切か
 - (ア)（辞書的、専門的な解釈において）

否定側は、肯定側の示したプランが、論題から逸脱していると判断した場合は、上記の点より論題の充当性の要件を満たしていないことを指摘することができる。またそれに対して、肯定側は自分の解釈の妥当性を証明することができる。ただし、論題を支持するプランとあわせて、補助的なプランや予防的なプラン（スパイクプラン）を採用することはできる。

この場合、発生するメリットが、論題を支持しているプランから発生していればそのメリットは成立できる。ただし、補助的なプランや予防的なプランからのみ発生している場合は、論題充当性を外した議論から生まれたメリットとなり、無効となる。

カウンタープランについて

BMにおけるカウンタープランの考え方

BMにおけるディベートでは、カウンタープランの採用を推奨しない。

その理由は、「プランを導入することのメリットとデメリットという問題の両側面を見ることにより、問題の本質に迫る」というディベートの本質をより追及してゆくためである。新たな発想や価値を生み出す可能性のあるカウンタープランの有効性は認めるものの、議論の本質を見失い、論理的技巧に走ってしまう可能性が高いと考える。

これらの考え方を理解したうえで、カウンタープランを採用する際には、以下の成立条件を満たす必要がある。

カウンタープランの成立条件

カウンタープランによって否定側が勝つためには、否定側が論題を否定する必要がある。

1、肯定側のプランに対する優越性

(ア) (否定側の提示したプランのほうが、肯定側よりも多くの利益を生む)

2、肯定側のプランに対する競合性

(ア) (否定側のプランが採択された場合は、①肯定側プランは同時に実行できない、もしくは、②カウンタープランだけを実行したほうが、両方を実行するよりメリットが大きい)

3、論題非充当性

(ア) (カウンタープランは、論題の規定する範囲の外にある必要がある。つまり、論題を否定している必要がある)

ニューアーギュメントについて

ニューアーギュメントとは

ニューアーギュメント（新しい議論）とは、相手が持ち出した主張に対する反論の場合を除き、立論で提出されずに反駁・最終弁論で新たに提出された「主張」や「論拠」は、「新しい議論」として無効な議論であるということである。

これは、肯定側・否定側、共通してあてはまる。

このルールは、フェアネスの精神から来ている。

具体的には以下の2点のディベートの考え方に起因している。

つまり、

- 1、相手に反論の機会を与えること
- 2、全ての主張を立論で出し、残りのパートは、それらの検証に利用すること

また、主張された直後のパートで反論されなかった主張や論拠は認められたものとし（沈黙は同意なり）、その後に主張されても、同じく無効な議論となる。

ニューアーギュメントがあった場合の採点方法

ニューアーギュメントがあった場合、その主張は全く無効とみなされる。

相手側チームは、そのことに触れる必要はない。また、加点の対象ではないだけで、減点の対象ともならない。

フィアットについて

フィアットとは

フィアットとは、肯定側プラン（否定側カウンタープラン）を実行する権力・機関は、その政策を実行するものとみなされること（ディベートにおける取り決め）である。

ディベートは、プランを実行すべきかどうかを議論するものであるため、プランが実行されるかどうかには固執しないようにする措置を取っている。

たとえば、「日本は大統領制を導入すべし」という論題でディベートする場合、大統領制を導入した場合のメリット、デメリットを議論することに重きをおく。

逆に、そのために必要な憲法改正が実行されるかどうかを論じる必要はない。

必要な法整備に関しては「フィアットがかかっている」とみなされる。

フィアットの判断基準

プランに必要な、「法整備がなされる」、「その為の国会での承認が得られる」、「国会承認の上、関連省庁・機関がプランを推進する」というものは、フィアットがかかっていると言える。

ただし、プラン実行のための予算や設備への投資、人材の確保などのプランを遂行してゆくための条件については、プランの実行可能性を立証する必要があり、争点となる。

否定側が肯定側プランの実行可能性を攻撃した場合には、フィアットがかかっていない部分について、プランの実行可能性をジャッジする。

価値基準について

価値基準とは

ディベーターが行う主張の幹となる考え方（哲学）のこと、また、哲学を支える基準のこと。

例えば、「原発を推進すべきか否か」のディベートにおいては、安全性こそ重要という価値に基づくことも可能であるし、安定性こそ重要ということも可能である。

ディベートにおいては、各争点の立証・反証も重要であるが、個々の争点をまとめ上げた哲学のぶつかり合いがその醍醐味となる。

ディベートにおいて競合する価値観は、以下のようなものがある

福祉国家←→自由競争

大きな政府←→小さな政府

安全←→効率

多様性←→固有性

発展←→成熟

革新←→保守

など

価値基準の評価

価値基準の有効性を検証するには、下記のポイントに注意する。

- 1、 価値として提示された哲学が、論全体との一貫性があるか。
- 2、 哲学として提示した価値を各主張が支える論理構成となっているか。
- 3、 価値基準を明確に提示しているか。
- 4、 なぜ提示した価値基準が重要であることを証明しているか。

キャストライトアップについて

キャストライトアップとは

キャストライトアップとは、論題にでてくる登場人物をピックアップすること。ディベートにおいて証明されるメリットおよびデメリットが、誰にとってのメリットもしくはデメリットなのかを明確にするために重要である。

キャストライトアップの判断基準

キャストライトアップの有効性を検証するには、下記のポイントに注意する。

- 1、 論題に関連するキャストをもれなくピックアップできているか。
- 2、 論題に関連するキャストのうち、自説に有用なキャストをピックアップできているか。
- 3、 キャスト毎のメリット、デメリットが明確に論証されているか。

インパクトについて

インパクトとは

メリットおよびデメリットを「質」と「量」の側面より評価したもの。

肯定の主張したメリットと否定の主張したデメリットを比較するには、メリットおよびデメリットがどの程度、各キャストにどんな利益もしくは弊害をもたらすのかを証明する必要がある。

インパクトは、質と量（確率）で評価する。

インパクト＝質×量（確率）

インパクトの判断基準

インパクトの有効性を検証するには、下記のポイントに注意する。

- 1、 メリットもしくはデメリットの対象（キャスト）が明確になっているか。発生過程の証明のなかで、量と質を明示しているか。
- 2、 どの程度の人々にどの程度の確率で、どのような良いこと（悪いこと）が起きるのか。
- 3、 質は、哲学を支える要素となっているか。

感情について

感情とは

単に感情的になることを指すのではなく、オーディエンスに感動や情熱をあたえ、心を動かしているかを意味する。

感情の評価基準

- 1、声、しぐさ、リズム、抑揚などの非言語表現が意識されているか。
- 2、聞き手に伝わり易い構成、ナンバリング・ラベリングとなっているか。
- 3、自説の主張者になりきっているか。

人間性について

人間性とは

ここでの人間性とは、信頼感、安心感のこと。

展開された論理とそれを伝えるための表現方法を通じて、オーディエンスが、「腑に落ちたと感じられるかどうか」が説得において重要となる。

人間性の評価基準

知性を感じさせているか。

明るさ、快活さ、を感じさせているか

力強さを感じさせるか

オーラを感じさせるか

ジャッジの手法

議論をひも解く

ジャッジは、ディベーターの行った議論をひも解き（論理的に解明し）、議論の優劣を判定する。議論をひも解くには、以下の手順でおこなう。

- 1、肯定側は、立証責任を果たしたか
- 2、否定側は、肯定側の立証を受け（議論の土俵に上がり）、反証責任を果たしたか
- 3、主要争点における攻防はどちらが勝ったか
- 4、主要争点におけるインパクトはどちらが大きいのか
- 5、インパクトの検証に必要な価値基準（哲学）は提示され、またその重要性を証明されているか。
- 6、証明の過程においてルール違反（ニューアーギュメント、証拠の誤謬など）がなかったか。

試合のフローシートを見直ししながら、上記の手順により議論をひも解いてゆく。

ジャッジシートへの記入

BM ジャッジシート構成、

論理部分（ロゴスポイント）70点、感情部分（パトスポイント）20点、人間的魅力部分（エトスポイント）10点という配点になっている

論理部分においては、さらに、哲学20点、現状分析・問題の分析の妥当性（立論と反駁パート）30点、反対尋問の有効性10点、最終弁論のまとめ度合い10点と分かれている。

以下、詳細の得点方法を述べる。

採点方法

採点方法（得点の付け方）は、5段階の評価を基準として各項目に割り振られた満点の得点を割り振ってゆく。

例) 10点満点の場合

非常に優れている	10点
優れている	8点
普通	6点
改善の余地がある	4点
改善の必要がかなりある	2点

ロゴスポイント 哲学 20点

ロゴスポイントは、内容、大きさ（量×質）、一貫性の3つの評価項目からなる

「内容」10点の評価のポイント

- ✓ 論題の本質をとらえた価値を提示できているか。
- ✓ 否定側においては、肯定側の哲学を受け、対抗する哲学を提示できているか。
- ✓ 各キャストにとって有効となる哲学となっているか。

「大きさ（量×質）」5点の評価ポイント

- ✓ 哲学を支える価値を「量」と「質」の両面から証明したか。
- ✓ 「量」においては、その総量と確率を明示できたか。
- ✓ 「質」においては、その重要性を証明できたか。
- ✓ 提示された大きさは相手を上回っているか。
- ✓ 相手の攻撃を受け弱められていないか。

一貫性

- ✓ 哲学とそれを支える価値観は、各争点の重要性を支えるものとなっているか。

- ✓ 各争点における価値観に矛盾はないか。
- ✓ 相手の攻撃を受け、弱められていないか。

現状分析・問題分析の妥当性（立論と反駁パート） 30 点

現状分析・問題分析の妥当性 10 点

- ✓ 論題を的確に捉え、メリット・デメリットに落とし込んでいるか。
- ✓ キャストを的確にあげられているか。
- ✓ 反論すべき点と、攻めるべき点をわきまえているか。

メリット、デメリットの主張 10 点

- ✓ キャストを明確にしたメリットになっているか。
- ✓ 論題充当性を得たメリットになっているか。
- ✓ 的確な証拠資料と論拠で証明されているか。
- ✓ インパクトは出されているか。
- ✓ インパクトは、哲学（価値基準）に裏付けられているか。

メリット・デメリットへの反証 10 点

- ✓ 相手の主張を受けているか。
- ✓ 相手の主張を支える、証拠へのアタックができているか。
- ✓ 相手の主張を支える、論拠へのアタックができているか。
- ✓ 相手の主張、証拠、論拠を受け入れ、自説へ展開しているか（ターンアラウンド）。

反対尋問の有効性 10 点

- ✓ 相手の主張の背景にある考え方を明らかにしたか（議論を一段深めたか）。
- ✓ 相手の主張の不明確な部分を浮き彫りにしたか。
- ✓ 争点を明確にしたか。
- ✓ 反駁、最終弁論につながる尋問を行ったか。

- ✓ 試合を決定づける（有利に運べる）、有効な指摘を行えたか。

最終弁論のまとめ度合い 10点

- ✓ 試合の総括ができたか。
- ✓ 各争点の自説の優位を、反駁までの議論を総括することで主張できているか。
- ✓ 哲学に立ち戻り、自説の優位とインパクトの大きさを再構成できているか。

パトスポイント 20点

プレゼンテーション 7点

- ✓ 分かり易い構成になっていたか。
- ✓ 適切なナンバリング、ラベリングがなされていたか。
- ✓ 反論においては、PREP、AREAが意識されていたか。

パフォーマンスの情熱 7点

- ✓ 声量、抑揚、リズムは、説得力を増すものであったか。
- ✓ 身ぶり手ぶり、視線は、効果的に使われていたか。

反対尋問での積極性 6点

- ✓ 主導権をとっていたか。
- ✓ 十分な手数とテンポの良さがあったか。
- ✓ 相手の攻撃に対して逃げずに対峙していたか。

エトスポイント 10点

身だしなみ 3点

- ✓ TPOをわきまえた身だしなみであったか。
- ✓ 清潔感がある身だしなみであったか。

話し方 3点

- ✓ 落ち着き、聞きやすさがあるか。

- ✓ 安心感、信頼感を聞き手に与えているか。
- ✓ 自信をもってプレゼンテーションをしているか。

フェアな議論を展開しているか 4点

- ✓ 相手の議論を正面から受け止めているか。
- ✓ 曲解、矮小化をしていないか。
- ✓ 証拠は正しく提示しているか。

最終ジャッジ

最終ジャッジを下す前に、試合全体を俯瞰してみる必要がある。

単にジャッジシートの得点を合計するのみではなく、各パートでの主張をパートごとにチェックし、「パートの役割を果たしているか」、「争点は正しく立証されているか」、「インパクトを出せているか」などを検証する。また、併せて各パートを横断して論全体を見直し、「試合中での各争点のもつ意味（インパクト）」、「哲学と主張の一貫性」などを再検証し、得点の調整をおこなう。

ジャッジシートには、得点とその判定理由を必ず明記すること。

以上